

生徒が生き方を考えるための資質・能力を育む
「総合的な学習の時間」の一考察
—— 3年間を見通したキャリア教育の実践を通して ——

石 川 勉

“Suggestion” Integrated Studies Developing
the ability to design life

Tsutomu ISHIKAWA

高崎健康福祉大学紀要 第19号 別刷

2020年3月

生徒が生き方を考えるための資質・能力を育む 「総合的な学習の時間」の一考察

—— 3年間を見通したキャリア教育の実践を通して ——

石 川 勉

高崎健康福祉大学 健康福祉学部 健康栄養学科

(受理日 2019年9月13日, 受稿日 2019年12月19日)

“Suggestion” Integrated Studies Developing the ability to design life

Tsutomu ISHIKAWA

Department of Health and Nutrition, Faculty of Health and Welfare,
Takasaki University of Health and Welfare

(Received Sep.13, 2019, Accepted Dec. 19, 2019)

要 旨

新学習指導要領が実施となる。そのキーワードはまさに「総合的な学習の時間」の充実である。しかし現在、義務教育諸学校、特に公立中学校では「総合的な学習の時間」が形骸化し、本来の目的が達成できていない場合がある。本考察は、これまで筆者が実施してきた教育委員会からの委嘱研究の取組から、キャリア教育の充実を通して、将来人生設計において自己解決できる力の基礎となるべき資質・能力を育む「総合的な学習の時間」の質の向上を図る方策を考えるものである。

1 はじめに

平成最後の3月下旬(2019年)、「中高年のひきこもり61万人」という新聞報道があった。内閣府が初めて調査したものだ¹⁾。平成28年(2016年)の報道では、若年無業者といわれる年齢15歳から39歳の非労働人口のうち、家事も通学もしていない人が54万1千人という調

査の数字は出ていた²⁾。つまり、これまで若者のひきこもりが問題視されていたのであるが、さらに中高年へと問題が大きくクローズアップされたのである。さらに報道では有名大学へ進学や大企業への就職を実現し、順風満帆であったはずが職場でのストレスからひきこもりとなる事例も紹介されたのである。

社会に出れば、仕事上の悩み、所得格差、心

身の健康問題、家族問題、地域とのつながりの希薄等、人生の課題は多い。その荒波を乗り越える力の源の育成が義務教育の使命であろう。将来に向けどれだけ基礎体力を養えるかである。学習指導要領には「これからの学校には、……、一人ひとりの生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」³⁾とある。

つまり、将来起こりうる問題に立ち向かう力、学習指導要領にある「生きる力」の育成である。中学校の取組は、将来に向けて小さな一歩ではあるが、基礎であり重要なものなのである。

これまで中学校では、将来、社会的・職業的に自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現するための力が求められていた。しかし、社会構造が変化し、雇用形態の多様化もあり、若年層の完全失業や非正

規雇用の増加、無業者や早期離職者の存在から「学校から社会、職業への移行」が大きな課題になってきた。これが若年層の問題である。

その問題を解決には「生きる力」の育成が重要なのである。「総合的な学習の時間」では、目標に「探究的な見方・考え方」「よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成」を掲げているのである。特に中学校では、キャリア教育を「総合的な学習の時間」に多く取り入れ実施している。その能力は高校や大学にて必ず大きく生まれ、社会に出た後も力強く人生を切り拓くと考える。

しかし、報道にあるとおり、生涯学習し続け、社会の変化に柔軟に対応し、各年代の課題に立ち向かい、中高年時こそその力が発揮できるようにせねばならない。「総合的な学習の時間」を初めて学習した生徒たちは30代である。まさに仕事の悩みやストレスに直面しているときであろう。はたしてその力が育まれていたのか。今一度その在り方を考えるべきではないのか。

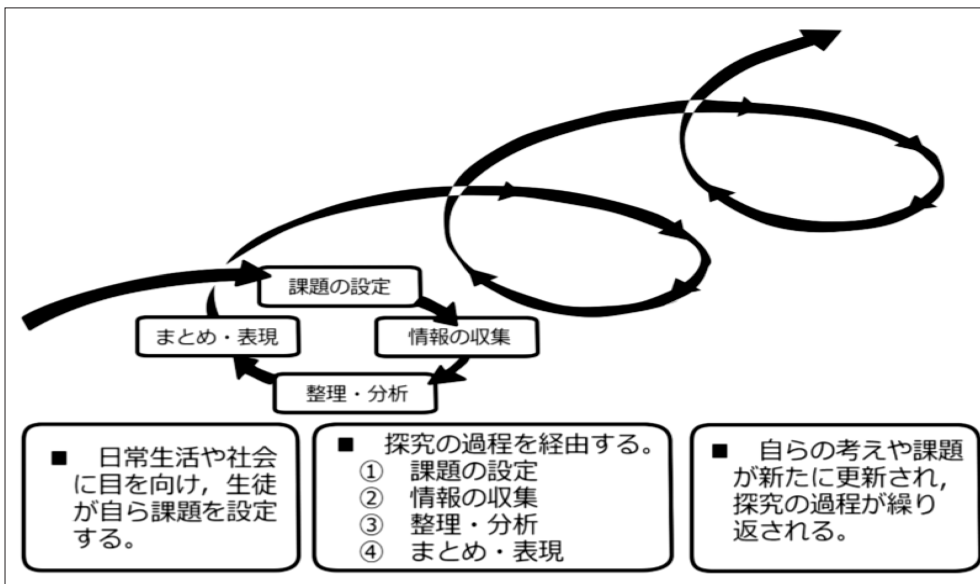


図1 総合的な学習の時間、探究的な学習における生徒の学習の姿

以上、筆者が実施したこれまでの道德教育の委嘱研究やキャリア教育の委嘱研究の内容⁴⁾から、「総合的な学習の時間」の部分に焦点をあて、基礎である義務教育時、「生きる力」をどのように育成すべきか考察したい。

2 中学校における「総合的な学習の時間」の今日的課題

まず、「総合的な学習の時間」の目標は次の通りである⁵⁾。

「総合的な学習の時間の目標」

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

以上、自らの興味関心から探究的な学習を行い、友人と高めあい、深めあいながら、情報を集め、整理・分析し、まとめていくことである。それは、図1⁷⁾にあるようにスパイラルで学習を高めていくことだ。これは時間がかかるもので、連続性が必要である。しかし現在、各学年の取組が単発化し、スパイラル化出来ていない

場合がある。原因は教員の忙しさ、様々な負担の中で「総合的な学習の時間」を実施するため、十分な事前準備、生徒への丁寧なアドバイス、事後のケアの時間確保が厳しいからである。

かつて、昭和50年代後半(1980年代)、校内暴力、いじめ、登校拒否(現不登校問題)などの問題が顕在化した。そして、それまでの知識重視の系統学習ではなく、新しい学力観に基づいた問題解決型の学習へと移行したのである。結果、平成10年(1998年)の学習指導要領改訂にて「総合的な学習の時間」が設定され、大いに期待されたのである。

しかし、OECD生徒の学習到達度調査⁷⁾(PISA)等の結果から全国学力・学習状況調査⁶⁾が平成19年度(2007年度)以降実施され、現在では多くの都道府県にても学習状況調査とその結果公表が行われるようになったのである。PISAが問う「読解力・数学的リテラシー・科学的リテラシー」は、「総合的な学習の時間」の探究的学習の中でこそ培われるものであろう。しかし、今や地域や保護者にとって各学校の学力向上は強い要望となっており、結果を急ぐ状況にある。そのため全国学力・学習状況調査に対する学力向上の取組にかなりの時間を要することとなり、「総合的な学習の時間」への準備や対応が不十分となっているのである。

次に新学習指導要領にある「総合的な学習の時間」の重要性を考える。今回の学習指導要領は、令和2年(2020年)に小学校が全面実施、令和3年(2021年)に中学校が全面実施となる。そのキーワードは以下である。

◎「学びの地図」単に点数のため知識を詰め込むのではなくそれをどう使うか。

①「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)

- ②「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)
- ③「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)
- ④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」(子供の発達を踏まえた指導)
- ⑤「何が身に付いたか」(学習評価の充実)
- ⑥「実施するために何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)
- ◎「カリキュラム・マネジメント」教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す実現
- ◎「学びの質の向上」[主体的・対話的で深い学び]【育成すべき資質、能力の3つの柱】
- 「どのように社会と関わりより良い人生を送るか」(学びに向かう力、人間性)
- 「何を理解し、何ができるか」(知識、技能)
- 「理解していること、できることをどう使うか」(思考力、判断力、表現力)

(学習指導要領より抜粋)

まさに、この内容を充実、かつ確実に実施していくことが「総合的な学習の時間」の充実に他ならない。つまり、「総合的な学習の時間」の課題の解決こそが新学習指導要領実施に必要なことである。

3 「総合的な学習の時間」におけるキャリア教育の課題

文部科学省平成25年度(2013年度)教育課程実施編成状況調査では、図2「総合的な学習の時間の実施状況(中学校)」の丸枠にあるとおり、多くの中学校がキャリア教育を「総合的な学習の時間」に取り入れていた。実施学校は95%を超えているのである。それは国際理解、環境、福祉と比べてもかなり多い割合である⁸⁾。キャリア教育の目標は次の通りである⁹⁾。

【キャリア教育の目標】

- 豊かな人生への生き方、理想の大人への「人

中学校における総合的な学習の時間の学習活動(平成25年度計画) (複数回答)

学習活動 学年	横断的・総合的な課題	生徒の興味・関心に基づく課題	地域や学校の特色に応じた課題	職業や自己の将来	その他
第1学年	55.1%	42.5%	74.2%	71.1%	8.6%
第2学年	53.5%	44.2%	60.6%	92.2%	8.5%
第3学年	56.9%	48.8%	57.8%	86.4%	8.5%
※実施学校	63.2%	55.5%	79.9%	96.3%	11.0%

中学校における総合的な学習の時間の具体的な学習内容(平成25年度計画) (複数回答)

学習内容 学年	国際理解	情報	環境	福祉・健康	伝統と文化	防災	まちづくり	キャリア	その他
第1学年	16.1%	28.8%	44.0%	42.0%	50.0%	23.1%	18.6%	69.7%	16.8%
第2学年	17.6%	28.7%	30.9%	34.1%	47.1%	21.9%	13.4%	92.1%	7.9%
第3学年	25.6%	29.8%	29.5%	39.4%	51.2%	22.1%	20.0%	83.2%	18.4%
※実施学校	33.1%	37.2%	53.1%	61.4%	69.9%	27.9%	26.6%	94.9%	22.7%

平成25年度教育課程実施・編成状況調査より

図2 総合的な学習の時間の実施状況(中学校)

格の完成」

- 肯定的自己理解，自己有用感の育成
- 正しい勤労観，職業観の育成
- 将来的進路計画立案と中期的な計画作成（高校進学）

このように，豊かな人生に向けて人生を切り拓く力の基礎を作るものである。この目標達成に向けて努力したいところである。しかし，課題は各学年の取組が単発になり，特に第3学年では高校進学の指導に重点が置かれてしまう現実がある。高校見学，授業体験や部活動体験で何を見てくるのか，まさに「総合的な学習の時間」の目標である探究的な学習ができていないのである。

これは，高校進学に向けた学力向上，入試得点の向上が第一の目標になっており，学校も生徒もキャリア教育の目標達成に時間とエネルギーを向けることができない現状がある。

4 蓮田中学校の「総合的な学習の時間」の特徴

表1「総合的な学習の時間3年間計画・各学年の年間計画」に沿って説明する。

(1) 「総合的な学習の時間」の大きな柱「A キャリア教育」を中心とする取組

「総合的な学習の時間」にキャリア教育の大きな柱を立て，3年間通して実施した。具体的には，1学年の「職業調べ」と2学年の「職業体験」が別の学習とならずつながることが大事で，スパイラルとして必ず次のステップの探究活動にし，新しい課題を見つけ学習を実施するのである。

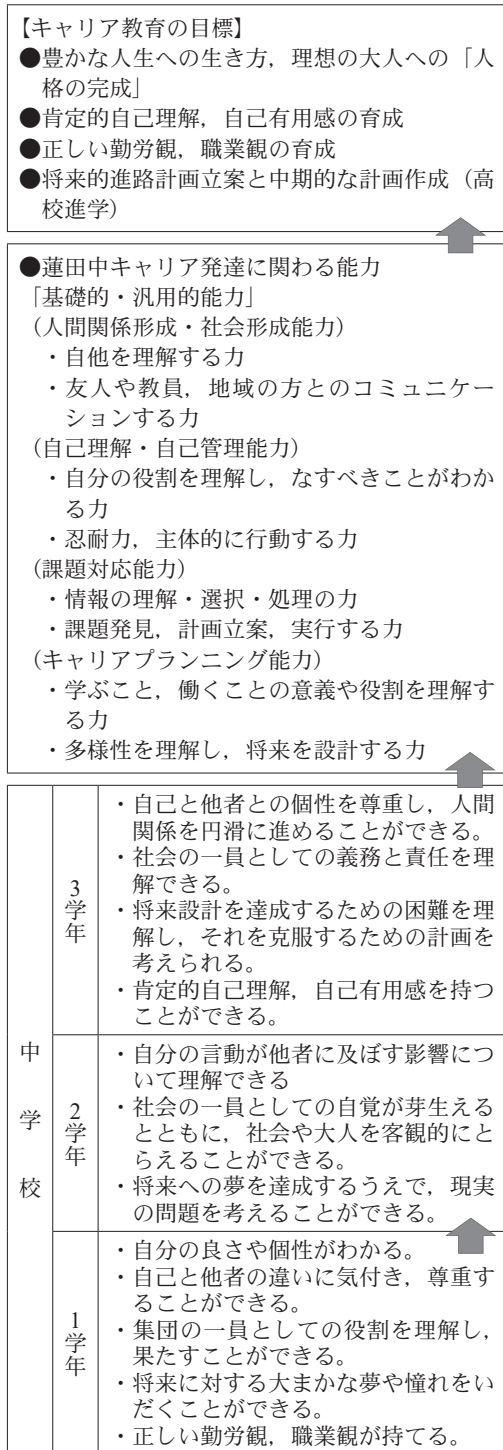
学年，学期ごとに自己評価と同学年の相互評価（横のつながり）を実施し，上級生のアドバイス（縦のつながり）を受けつつ，また自らも

表1 総合的な学習の時間3年間計画・各学年の年間計画

学年	学期	A キャリア教育の柱	B 学年テーマ	C 他・関連の学習
1	1	オリエンテーリング (卒業生からの手紙)	宿泊学習取組	【学校全体の学習】 ・全校読書 ・ユネスコスクール ESD取組 ・携帯スマホ利用教室 ・いじめ防止教室 ・薬物乱用防止教室 ・交通安全教室 ・防犯教室 等
	2	職業調べ (2年生からのアドバイス) (身近な大人のアドバイス)	環境学習 (ドクターフォレスト) (エコプロダクツ)	
	3			
2	1	職業体験 3day (地域大人からのアドバイス) 人生設計 (人生ゲームづくり) (身近な大人のアドバイス)	福祉学習 (車椅子，アイマスク，点字) (介護・認知症サポーター養成)	
	2			
	3	上級学校調べ (3年生からのアドバイス)	修学旅行事前学習	
3	1	高校調べ (高校情報収集)	修学旅行取組学習	
	2	高校見学・高校授業体験	親学 (保育，薬の使用) 保育園幼稚園体験，薬剤師講演	
	3	自分史作成 小6児童への手紙	租税教室 税務署等講師 合唱の伝統引継	

埼玉県進路指導・キャリア教育研究委嘱発表資料

図3 蓮田中学校・総合的学習の時間（キャリア教育）目標図



埼玉県キャリア教育研究会委嘱，蓮田中研究発表資料

後輩へのアドバイスを実施していくのである。これが現在の自己を振り返ることになる。

①キャリア教育における3年間で育成すべき力の内容の明確化

単発単元で終わらない一貫した「総合的な学習の時間」の取組が必要であり，キャリア発達に関わる能力を4つとした。それは「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」である。また，各学年の目標は「蓮田中学校・総合的な学習の時間（キャリア教育）目標図」の通りである。

②具体的戦略

「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・整理」のスパイラルの明確化

各学年での学習スパイラルは短時間で行わねばならない。生徒に学習のねらいを教員が明確に打ち出し，探究活動をきちんと積み上げねばならない。そのための方策は次の通りである。

1) 学期末の振り返り，年間の振り返りの実施

環境，福祉等の学習で使用したプリント綴りを別に保存せず，キャリアファイルと共に一括保存した。学習ステップ「課題の設定」→「整理・分析」→「まとめ・整理」をしっかりと記録し，積み上げサイクルを作る。自分の成長がわかるのである。

2) 個人ファイリング実施の充実と班新聞づくり

ファイリングでは3学年統一した積み重ねを行った。3カ年で3冊を作り上げることである。

また，各班の取組は班新聞として模造紙に集約され発表後に廊下に掲示した。班新聞は一定期間の掲示の後，次の学年に引き継がれ，次年度の学習前に掲示した。これは縦のつながりで，

次の学年の「自分ならこうしたい」という意欲喚起には大変良い取組である。

3) 教え合い, 認め合い, 励まし合う相互評価

横のつながりである同学年でアドバイスをする活動を各学年, 学期末に1時間扱いで実施した。これまでの自分の取組をプレゼンし, 職員からのアドバイスをもらい, 評価票はA4プリントに添付し, ファイリング保存の積み上げを行った(図4参照)。

キャリア教育相互評価票
○年○組 評価者****
●***君へのアドバイス
●設定課題は適切であったか?
●取組は内容の良かった点
●今後へのアドバイス

図4 キャリア教育相互評価票

これはキャリア教育の視点であり, 大きな柱であるので全員でしっかりと共通認識することが大切である(前頁「図3」参照)。目標が明確とならねば活動あって学び無しとなるからである。そしてこの目標を生徒に伝え, 生徒自身で自分は成長できているか学期の終わりに確認させることである。生徒同士の相互評価を実施し, 互いにアドバイスし合うことで再度自分の目標が見えてくるのである。

4) ゲストティチャーから生身の実体験を聞く

キャリア教育としてゲストティチャーを招聘して「ふれあい講演会」を充実させた。対象は

全学年であり年1回は実施した。地域職人, そば職人, 消防士, 住職, 幼稚園長など, 身近な人の苦勞話を聞くことで現実を知ることである。

5) 「総合的な学習の時間」で人生設計の基礎づくり

3年間の中で何度も自分の人生設計を考える時間を設けた。2学年では, より具体的な人生設計である「職業選択」と「人生設計」を実施した。3学年では高校進学学習と「自分史づくり」, 「小6への手紙」(掲示用)作成をした。義務教育最後の振り返りである。3年間, そして9年間のまとめの自分史である。

(2) 総合的な学習の時間「B学年テーマ」を設定した取組

「総合的な学習の時間」の「B学年テーマ」は, 1学年が環境, 2学年が福祉, 3学年が修学旅行や親学の取組であった。主である「キャリア教育」とは別に取り組むもので, この学年テーマへの外部人材や教育団体の導入が大変効果を上げた。つまり, 教員の負担軽減には重要な導入であったのである。具体的内容は以下である。

①具体的実施内容

1学年の環境学習では, 積水ハウス㈱の「ドクターフォレスト」, 「エコプロダクツ展」を利用した¹⁰⁾。2学年の福祉学習では, 車椅子体験, アイマスク体験, 点字体験の実施, また認知症サポーター養成講座(厚生労働省管轄)も行った。それらは市福祉課や福祉協議会を利用した。3学年の「親学」学習では, 保育体験で市内幼稚園を, 薬の正しい使用学習では薬剤師を, 租税教室では租税教育推進協議会などを利用した。

その実践から多くの課題が見つかり, その改

善策が教員たちによって生み出されていったのである。

1) 外部人材, 教育団体導入の課題と対策

外部人材や教育団体導入には課題はある。それは費用面ではない。事前の準備や事後の手間だけでなく、生徒の興味関心を引き出す授業展開をどう作るかである。つまり、市の職員や協議会の人材は話のプロ、教育のプロではないということだ。事前に教員がどんな学習なのかを生徒に紹介し、興味関心を高め、各自の課題を見つける意欲を喚起し、探究への道筋を付ける必要がある。また、事後はその整理、まとめを積み重ねとして残すこと、次の学習へのステップとすることである。学習を実のあるものにせねばならないのである。

課題解決への探究心の喚起方法については、何が問題なのか、何を調べるのか、テーマは何か、情報収集の集約方法、まとめの記述等、プリントの形式を事前打ち合わせから教員のアイデアでより良いものへ変更させた。これは外部人材では厳しいものである。

2) 「総合的な学習の時間」をどう体験的に充実させるか

これは様々な取組をつないで充実させることだ。インターネットや文献だけを調べてまとめる学習ではない現実の学習とのつながりである。実施した例として、環境学習と地域のゴミ拾い環境美化運動参加がある。

市の環境美化運動日への参加や、駅伝大会前の用水路横ロードの美化運動実施などを実施した。つまり、環境学習は身近なところにあり、3年間続いていることを伝えた。日々の様々な環境学習を無駄にしないことである。

(3) 総合的な学習の時間「C他・関連の学習」と関わる取組

「総合的な学習の時間」の充実を図るためには、「総合的な学習の時間」と多様な取り組みを関連付け、充実させる必要がある。

①ユネスコスクールの取組

平成27年(2015年)に、それまでの本校の取組がユネスコに評価されユネスコスクールに認定されたのである。そこで地元ユネスコ協会と連携し、「ふれあい講演会」に特別な講師を招聘することができた¹¹⁾。講師は、平成28年度(2016年度)は第33次南極地域観測隊長兼越冬隊長を、平成29年度(2017年度)はJICA シンガポール事務所長をお招きすることができ、生徒は大きな刺激を受け、将来宇宙飛行士になりたいと夢を持つ生徒もでてきたのである。

②総合的な学習の時間」と教科、特別活動等との横断的な学習の重要性

「総合的な学習の時間」の3年間の計画、各学年の年間計画の実施には各教科、特別活動との関わりが大きい。各教科の基礎的・基本的な知識・技能の習得はすべての学習の基本である。特別活動では学級活動、生徒会活動、学校行事を通して友人や先輩、後輩、集団と協働し人間関係を構築すること、人間としての生き方の考えを深め、自己実現を図ることが重要である。

③全校統一形式の生活記録ノートの利用

学力向上を目的に、生活記録ノートを全校で統一し、家庭学習の取り組みを補った。帰りの会で家庭学習時間の予定を記述し、実施後に赤ペンで修正、翌日提出としたのである。全校統一の生活記録ノート実施には教員の理解を得るため1年半を要した。結果としてこの取組から生徒は「総合的な学習時間」の自己計画案にお

いて、時間の作り方、情報収集の計画立案、整理分析などの力量向上に役立たせることができた。

④全校読書の充実と作文力の育成

全校読書では、自分を見つめる時間の確保と読書による知識や知恵、興味関心の喚起の仕込み、基礎力の育成を目指したのである。さらに、作文力の向上では、各教科内で短文作成、葉紙の利用、発表ボードの利用等を実施した。

読書の取組は、「総合的な学習の時間」の充実には大変重要である。そして、学校図書館の活用は、いかに自力で情報を取得し、情報を活用できるか、また解決へのフロー図を作れるかに役立つのである。それにはきっかけを作れる人材が必要であり、司書の導入や司書教諭との連携、さらには市教育委員会への図書予算の確保の要望も重要である。

⑤教育課程を共有する小中連携

小中連携は入学時に行う学校は多い。それを単発ではなく、8月、1月、3月、5月とそのねらいごとに実施した。

中学校の小中連携は、クラス編成のため生徒指導の情報交換や特別な配慮を要する場合の情報交換となりがちである。しかし、教育課程の連携こそ必要である。小学校の「総合的な学習の時間」で環境学習や福祉学習等、どのような学習をしてきたのかについて、キャリア教育の視点での情報収集に努めた。そのためには複数回の実施が必要であった。

⑥「総合的な学習の時間」と道徳教育の取組

「総合的な学習の時間」の探究活動のスパイラル化には学級集団という学習環境作りが大切である。その学習集団の育成では道徳教育が欠かせない。一人のリーダーも大切であるがリーダーを支える10人のサポーターをいかに育成

するかが重要なのである。例えば、いじめの兆しはどこの学校、学級でもある。「やめなよ！」といえるリーダーも大切である。しかし、「その通りだ！」と言える周りの10人がいかに重要かである。「総合的な学習の時間」における対話をより充実させるためには、授業の関係性をより良くするための道徳教育が不可欠なのである。「教え合い、認め合い、励まし合い」の醸成である。

道徳教育の一例として、学期末の表彰集会を利用したクラスアンケートが大変効果的であった。「クラスのために動いてくれた人、良く掃除を頑張った人、給食準備で頑張った人、係活動で頑張った人」等を生徒の立場、目線で調査し表彰したのである。「あの子は頑張っている。すごいなあ、僕も頑張ろう。」このような学習環境を日常的に育てていくことが大切である。

5 「総合的な学習の時間」の具体的実践 「2学年取組『蓮田中オリジナル人生ゲーム』」

「A キャリア教育」に位置づけられる取組であり、職業選択や人生設計を考えた学習意欲を高める「総合的な学習の時間」を使ったオリジナルゲームの製作である。ここまで1学年では職業調べ（産業別職業、公務員、興味関心のある職業等）を実施し、2学年では職業体験（3day）を実施した後の人生設計学習である。そしてその後、上級学校調べを行い3学年に続くのである。「総合的な学習の時間」には遊びや感動の視点が重要であり、探究活動の積み上げには、友人との楽しい時間を作らねばならない。これは他のプログラムと比較しても、人間関係育成能力、課題対応能力の育成においてか

なり自発的かつ意欲的な取組となった。遊びや感動の視点を取り入れることにより、さらに興味や関心を広げ深めることができたからである。実際に実施した内容を以下に示す。

(1) 人生ゲームの内容

この取組には10時間(本時7時間目)を使用した。アメリカで生まれ、日本でも多く発売された「人生ゲーム」の簡易版である。ルーレットの代わりにサイコロを利用し、双六のように進みながら職業に就き、人生の様々なことを経験しながら財産を積み上げていく内容である。

取組は、まず学級各班6~7人で班ごとにゲームシートの作成、事前調査のワークシート、本時授業用ワークシート、財産計算用ワークシート、事後感想シートを用意する。

各班のゲームシートは時代別にコースに分かれる。コース作りは、「A:学生時代(進学等の悩み)」、「B:20代就職時代(就職の悩み)」、「C:30代結婚子育て時代(子どもの悩み、家庭の悩み)」、「D:40代独立・中間管理職時代(リストラ、転職、家購入)」、「E:50代ベテラン・管理職時代(責任問題、経営不振)」、「F:60代定年後の生活(介護、同居、改築、健康問題)」とした。

次にゲームシートには空欄のマス目がある。マス目は「◎○△☆×給」で埋め、それぞれ◎大変良いこと、○良いこと、△良くないこと、☆就職、職業決定(ゲームでここに止まれないとアルバイト、派遣社員となる)、×とても悪いこと、給:給料日・収入の日などとした。また、職業カード(A~E)を準備した。内容は、「A:公務員(国家公務員、教師、消防士、警察)」、「B:スポーツ芸術(サッカー、野球、音楽、作家)」、「C:自営(農業、外食系、自動車修理

自営、工務店、医者など)」、「D:会社員(IT系、保険、銀行員、マスコミ、建築、各運転手等)」、「E:未就職(アルバイト、派遣など)」とした。

(2) ゲーム作成に向けた各自の取組、様々な人生調査の内容

ガイダンス後の各自の取組で人生の各年代の調査学習を行った。学生時代、就職期時代、結婚独立時代、会社に入ったり事業を興したり、また中間管理職時代など、年代ごとに何があるのか、身近な大人からの聞き取り調査を行った。1学年職業調べにおいても身近な大人から情報収集を行ったがその学習の発展である。

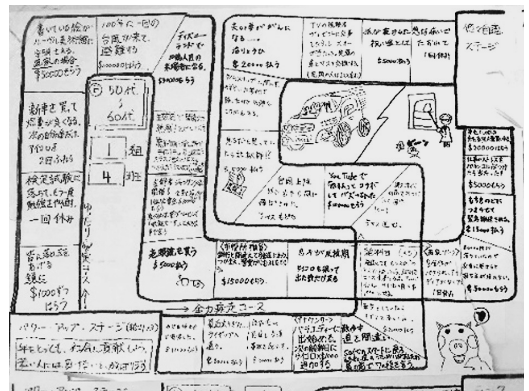


写真1 一例、班作成人生ゲーム

また、家庭の子育てにも時代がある。幼い子育て時代、子どもの小中学校時代、習い事への送り迎えや部活動の協力などが大変である。そして高校や大学への受験や進学、その費用負担は大きい。まさに、今現在の生徒の家庭の状況である。そして、子どもの結婚、孫の世話、親の介護と続くのである。各自の調査内容を人生の年代ごと、家庭の年代ごとに仕分けし、班内でまとめた。

内容の例を挙げると(現実も想像もある)、「希望の職業に就けず資格の取得」、「結婚後の自

分や妻の病気],「子どもの世話,怪我,病気],[今,親に感謝している部活動や習い事の送り迎え],[今,親が悩んでいるであろう受験費用捻出],[家の購入,改築],[父親の転勤],[交通事故遭遇],[祖父母の介護],ユニークなものに「宝くじに当たる」「海外旅行に行く],その他に「ペットの死],[別れ・離婚]等もあった。

以上,生徒は2学年であるが現実をよくとらえており,真剣に考えている。その内容は大変興味深いものであった。家庭での楽しい会話が想像できるものである。その内容を職業の出来事,家庭での出来事に仕分け,その中で寿と苦勞とに仕分けた。この内容をゲーム感覚で班内で合体させ,人生ゲームを作成した。作成した例が前頁の写真である。ゲーム実施は委嘱発表当日であったが,楽しく学び,積み重ねをゲームにする感覚は必要であり生徒は主体的に生き生きと参加することができていた(写真2)。



写真2 人生ゲーム活動の様子

(3) 取組の成果

生徒の成果と反省記述には「とても楽しかった」「親の苦勞,いろいろな職業の大変さがわかった」が多かった。また,ゲームを通して人生に起こりうる出来事を再認識し,「この年代で起こることは何だろう。そんなに甘くないと考

える」等,深い気付きもあり,「人生設計項目をもう少し考えるべきであった」等の反省も見られた。これは次の上級学校調べにつながり,3学年の高等学校体験,進路決定,将来への職業選択の学習の基礎になるものとなった。

学校だよりの教員感想からは「昔は携帯電話もなかった。君たちの将来は人工知能(AI)が発達し,仕事も変わってくる。人生に対してもより想像力が大切だ」等のアドバイスがあった。

保護者からは「家庭で子どもと職業について話題が持てた」などが多い。また,「子育ては苦勞ではない。楽しい時間であったと伝えることができた」等,評判は大変良かった。PTA本部役員からも良い声を多く聞くことができた。それは家庭で生徒が情報収集するために親と話をする時間が多く取れたためである。親の子育ての苦勞話が自然にできたのである。親も時として愚痴はあろう。しかし,苦勞を子どもに話すことは少ない。それをきちんとできる時間が持てたのである。

まさに,この取組の良さが出て,キャリア発達に関わる能力の育成ができた。生徒一人ひとりが人間関係を構築し,課題対応を意欲的に主体的に行うことができた。それは,生徒自身が今後会うであろう困難に,いかに対処すべきかのヒントを得ることができたと考える。

6 実践の成果とそこから期待される資質・能力

「総合的な学習の時間」の3年間の柱に「A キャリア教育の柱」をおくこと,補佐とする「B 学年テーマ」を設け教員の負担軽減をはかること,その他「C 他・関連の学習」とし,特別活

(4 そう思う, 3 ややそう思う)		生徒用				保護者用				教員用
		1 学年	2 学年	3 学年	全体	1 学年	2 学年	3 学年	全体	全体
1	何事にも失敗を恐れずにチャレンジしているか。	80%	80%	74%	79%	70%	73%	80%	73%	94%
2	学習をはじめ教育活動に一生懸命に打ち込み、自らの可能性を伸ばしているか。	77%	86%	87%	83%	73%	80%	85%	79%	100%
3	集団の一員として自分の役割を積極的に果たし、よりよい集団づくりに貢献しているか。	79%	91%	88%	86%	87%	89%	89%	88%	100%
4	言葉の大切さを理解し、言葉の果たす役割の重さや素晴らしさを実感し生活しているか。	83%	91%	90%	88%	74%	72%	81%	75%	94%
5	善い行いや美しいものに感動し、人間や自然、生命の素晴らしさを感じているか。	86%	82%	90%	86%	77%	84%	83%	81%	100%
6	互いに教え合い、認め合い、励まし合い、人として高め合う努力をしているか。	90%	92%	92%	91%	82%	94%	95%	89%	100%
7	学力が向上していると思うか。	78%	80%	83%	80%	62%	63%	78%	66%	100%

(蓮田中学校 平成29年度末学校評価資料)

図5 平成29年度末学校表評価抜粋

動や教科と関連させ充実させた実践内容はどのような成果があったのだろうか。

成果の一つ目として、平成29年度末(2018年度末)の学校評価の抜粋(図5)から成果を見てみる。

平成26、27年度(2014、15年度)道徳教育の委嘱研究の後、平成29年度のキャリア教育の委嘱研究があったため評価は高い。その意識の高さの持続が成果の一つといえよう。

成果の二つ目として、「学習に対し一生懸命に打ち込み自分の可能性を伸ばしているか」の問いでは83%の生徒が肯定している。「集団の一員として自分の役割を積極的に果たし、よりよい集団づくりへの貢献」では86%、その際の「教え合い、認め合い、励まし合い」の努力では91%である。ここで重要な数値は教員の100%であり、いかにこの数年の取組が充実している

かである。本来教員評価は厳しいものである。その教員が生徒に対し100%の努力を認め、本当に頑張っていたと認めた成果である。

成果の三つ目として、「総合的な学習の時間」の「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・整理」のスパイラルが実施され、探究的な学習が見られたということである。

特に、学習集団のよりよい環境作りができていく。生徒の肯定的自己理解、自己有用感が育まれ、将来に向けて豊かな人生の基礎づくりができつつある。

以上から、「総合的な学習の時間」を実施することにより、将来様々な問題に直面した時、どうすべきか、生徒が生き方を考えるための資質・能力を育むことができつつあると言えよう。また、将来友人と相談し、共に就業を支え合うことができるような共助の精神が培われている

と確信する。

7 おわりに

人生には挫折は当然あるものだ。しかし、そこでいかに人と関わり、その困難を乗り越える力が発揮できるかである。また、その困難な時期に、人とつながり助ける共助の意識を持てる仲間がいるかである。100人中、90人にキャリア教育の能力が育ったとしても10人は残される。その10人に声をかけサポートできる人を何人育てることができるかである。

平成31年(2019年)4月の報道によれば¹²⁾、首都圏で7人に1人の子どもが貧困状態にあるという。これはクラス内に5人はいるということである。様々な環境から何とか抜け出せる力、その基礎を義務教育で付けることが出来ればと考える。多くの生徒が志望する高校や大学への進学を目指し、そのために日々頑張っている。しかし、就職し、その後の人生には悩みや挫折は当然あるものだ。その時に誰かとつながり、悩みを共有し、自分なりの課題への道筋を見つけられるか。そのための基礎となる共助の働きかけであり、「総合的な学習の時間」の目標にある「互いの良さを活かしながら積極的に社会に参画しようとする態度の育成」である。このような意識を持つ子どもたちが増えるような授業展開が、将来に向けて重要なのである。ユネスコスクール取組の講演会后、学年たよりに次の内容があった。「JICAの方の言葉『国際支援で大事なことは魚を捕ってあげることではない。環境を考えつつ、魚を捕る方法を教えてあげることだ。』があった。さあ、君たちはこの言葉をどう考えるかい?」である。子どもたちの意識を伸ばすには、このような教員のアドバイス

の積み重ねが必要である。

利益相反

この研究一考察に関して、利益相反はない。

【参考文献等】

- 1) 2019.3.30 毎日新聞 内閣府調査結果公表資料
- 2) 2016.9.8 日本経済新聞 内閣府調査結果公表
- 3) 文部科学省「中学校学習指導要領」(平成29年告示) p.17
- 4) 委嘱研究「平成29年度(2017年度)埼玉県進路指導・キャリア教育研究委嘱、埼玉県蓮田市立蓮田中学校研究発表紀要【自主、自立の意識を育む指導の工夫改善～道徳教育を基本としたキャリア教育の推進～】」,「平成26,27年度(2014,15年度)埼玉県蓮田市教育委員会委嘱、蓮田中学校研究発表紀要【「知・徳・体」の調和のとれた生きる力の育成～道徳教育の充実をとおして～】」
- 5) 文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総合的な学習の時間編」第2章総合的な学習の時間の目標 p.8
- 6) 同上 p.9 目標の趣旨
- 7) 国立教育政策研究所(文部科学省)HP. 教育課程研究センター「全国学力・学習状況調査」, OECD 生徒の学習到達度調査, 調査国際結果の要約 p.5
- 8) 文部科学省「平成25年度教育課程実施編成状況調査」,「総合的な学習の時間」(中学校) p.19
- 9) 上記研究委嘱から「平成17.5キャリア教育の推進に向けて」(文部科学省リーフレット)からまとめ。
- 10) 「ドクターフォレスト」は積水ハウス株式会社の教育支援活動であり、「生態系」の環境教育「Dr.フォレストからの手紙」が名称である。校庭などの身近にある自然をテーマに自然の生態系の大切さについて学び、生物や植物の生きるための工夫や課題の発見を通じて、自然や命の大切さに対する興味・関心を高めることをねらいとしている。時間数を短縮し実施した。「エコプロダクツ展」は社団法人産業環境管理協会、日本経済新聞社が主催し、会場は東京ビッグサイト、後援は経済産業省、環境省、文部科学省等である。出展数約750社、来場者約18万人。
- 11) 「国際ユネスコスクール認定校」。ユネスコスクールは世界で181校、日本で583校(2013年現在)

が加盟, ESD「持続可能な開発のための教育」を推進する。蓮田中学校は平成27年2月に認定を受けた。



- 12) NHK「首都圏情報 ネットドリ！」「貧困から抜け出したい中学生の決意」(平成31年4月).

その他, 参考資料

平成29年度(2017年度)版中学校学習指導要領の展開 総合的な学習の時間編 明治図書 田村学編著